みんなの広場

スピーカーズコーナー

FIGHT

編集委員が地域の皆さんにインタビュー！

今回は広報誌として大先輩である『広報にいじま』を担当する、企画調整室の小倉萌未さんにお話をうかがいました。

木村：議会だよりは今年100号を迎えました。一方『広報にいじま』は510号と圧倒的な発行数で、新島の顔ともいえる存在です。歴史あるメディアを発行するにあたり、どんなところが大変ですか？

小倉：広報にいじまは企画調整室の担当で、私も採用初年から一人で担当しています。毎月1～2週目には着手し、中旬までに記事を完成。月末に村内の全世帯に配布されるというペースを毎月繰り返しています。表紙には月の目玉行事を取り上げるので、休日に取材に回ることも多いです。

木村：編集するにあたっては、マニュアルや研修などがあるのでしょうか？

小倉：基本的には前任者からのアドバイスと編集方針を引き継いで進めています。おすすめの取材イベントも先輩に教えていただきました。カメラも使い方を教わり、誌面編集ソフトや写真加工ソフトの研修も受けました。

木村：最近は役場の仕事紹介など、新しい企画もありますね。企画内容はどのように決まるのでしょう？

小倉：仕事企画は、上司からの提案がきっかけでした。役場は住民のみなさまにとって身近な存在でありながら、職員がどんな仕事をしているか知らない方が多いので、分かってもらえるように紹介したらどうか、ということで。

木村：広報にいじまには住民に向けた議会活動も掲載していただき、大変ありがたく思っています。議会広報と行政広報との関わりをどのように考えていますか？　議会だよりの印象はいかがでしょうか？

小倉：広報にいじまとして、「村民のみなさまに村の情報を広く周知すること」を第一にして、村の予算なども掲載しています。議会だよりとの記事や写真の重複はそれほど意識していません。議会だよりは、複雑な答弁を限られた分量でまとめられていて、大変そうだなと思います。

木村：広報担当をして良かったことはありますか？

小倉：島外の方とのやりとりが多い係です。村の現状や、島外の人が村をどんな風に考えているのか客観的に知ることができて良いなと思います。

木村：行政広報も担当者の努力と研鑽（けんさん）に負うところが多いと痛感しました。議会広報も無理のない次期体制を検討したいです。ありがとうございました。

編集後記

ご愛読、ありがとうございます。

10年ほど前の白書に、「現状推移すると数十年後には、東北はじめ、数県が自治体として消失する」というような記述があったが、新島村は、それ以上に深刻な気がする。

住民には優秀で、良い案をお持ちの方が多数おられるが、それが一つにまとまっての実践に繋がらない。折角の頭脳も妙案も、宝の持ち腐れである。

村で「協働」という言葉を発信しているが、現状、言葉だけが先行している。行政だけでも、住民だけでも駄目、村全体が一丸となって協調・協力し改善に向け対処することが肝要である。その仲介役は我々議員であるが、今、村全員で考え大きく動かないと、10年、15年後の先行きが危惧される。　（前田　泉）

広報編集委員会メンバー
委　員　長：小久保 利佳
副委員長：木村 諭史
委　　員：前田 泉
：前田 寿夫
：青沼 弘